

## 巻頭言

# 『遠野物語』にみる自然との共生社会

---

NPO 法人防災白熱アカデミー 理事長

高 田 至 郎

---

日本の民俗学の父と言われる柳田国男は『遠野物語』を著わした。昨年2021年には『遠野物語』発刊から110年が経過し、多彩な行事が遠野郷で開催された。『遠野物語』には、河童・妖怪・山人・山神・熊・狼など深山の動物達が登場する。しかし、『遠野物語』は、神話や昔話ではなく、遠野郷で生活した村民たちに伝承されてきた日常生活での奇妙・不思議な出来事が綴られている。柳田は『遠野物語』の序章に、「願わくばこれを語り、平地人を戦慄せしめよ」と述べている。すなわち、物や人があふれる賑やかな街中のできごとではなく、山地・谷・川などの近隣の大自然の中で言い伝えられる伝承を街の住民に語って、大自然なくして人は豊かな生涯を過ごせないことを思い出させよ、と警告した。

物語の序文には、此話はすべて遠野の人、佐々木喜善君より聞きたり、とある。佐々木喜善は明治19年(1869)に遠野の土淵村の山口集落で生まれ、早稲田大学で学び、上田敏などの評価を得ながら小説を書き、北原白秋など、文壇の若い仲間や友人がいた。佐々木は遠野に伝承された民話に極めて多くの知見をもっており、柳田に語り聞かせた。

「願わくは之を語り、平地人を戦慄せしめよ」という序文の言葉で、柳田が想定した戦慄せしめたい「平地人」とは、当時、周辺村落よりも賑やかだった遠野の街の人々である。あるいは、今日、この物語を読み、今を生きる我々への警鐘かもしれない。『遠野物語』の第99話に紹介されているのが、明治29年(1896)6月15日、旧暦5月5日の端午の節句の日に発生した明治三陸大津波(大海嘯)についての物語である。内陸遠野での津波ではないが地域には大きな出来事が伝承されていた。『遠野物語』には、山田町の船越半島の付け根に、田の浜という集落がある。登場人物の福二は当時、その集落の長根という家に婿に入っていた。そして三陸大津波に遭遇した。田の浜では138戸の家のうち129戸が流失し、死者が483人、生存者は325人であった。柳田は『遠野物語』の中では、「霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女は正しく亡くなりし我妻なり。思わず其跡をつけ、遙々と船越村の方へ行く崎の洞ある所まで追い行き、名を呼びたるに、振返り、“にこ”と笑

いたり。男はと見れば此も同じ里の者にて海嘯の難に死せし者なり。自分が婿に入りし以前に互に深く心を通わせたりと聞きし男なり。今は此人と夫婦にありと云うに、子供は可愛いくは無いのか、と云えば、女は少しく顔の色を変えて泣きたりと語り…」、自分が生んだ子供の話を柳田の物語は書きとどめ、奥さんは、これからは女性として生きると、強い意志を示すが、福二のほうは、母親としての愛情はなくなったのかと迫る。すると奥さんは顔色を変えて泣くが、結局、好きな男と一緒に去っていく。「悲しく、情なくなりたれば足元を見て在りし間に、男女は再び足早に立ち退きて」、とある。『遠野物語』は悲しみを伝えることもさることながら、子供を捨てて、女性としての人生を再び歩む、という悲しみを乗り越える生き方もあることを伝えている。

私共のNPO法人では「防災学習」の中で『風の電話』（いもとようこ作：電話線のない受話器で亡き人へ語らい、悲しみを癒す）、『希望の木』（新井満作：1人だけ生き残った松の木が夢で家族達に出会い、自死の思いを断ち切り、再び命のバトンリレーを決意する）、『Big Wave』（パールバック作：漁師の親を亡くした子供が友人の家族に見守られながら、再び津波が襲うかもしれない海岸での漁師生活を決意する）、『青い鯉のぼり』（金菱清編集：亡き子供の七五三の折の泥だらけの青い鯉のぼりを全壊の家屋から見つけ、生き残った兄が、全国に呼びかけ青い鯉のぼりを空高く掲げるイベントを続ける）などの「語り」を通じて、自然災害への遭遇と、還って来ぬ人への思いや自らの災害後の対応を語り合っている。

災害により還らぬ近親者への喪失感、災害の悲惨さ、残されし者のサバイバル・ギルティの語り合いでもある。

柳田は、遠野村落の小宇宙を、現実の地と、一方、山・谷・河川の自然山地を異界に分別し、そして現世と異界の境界の地での山人の生活・出来事を綴った。そこには、「新田乙爺の助け小屋」「ダンノハラ老人の話」「オシラサマ」の物語など119の物語がある。心癒す豊かな自然とともに、突然に恐ろしい姿を見せる自然を語りながら、現在の課題である、長寿高齢者への介護や福祉、共に生きる村落社会、生活弱者の生き方、衣食住の苦難、災害対応など、今日の解決すべき課題への智慧を多くの物語から得られる。

さらに、現在は、街の平地人が、自然を無視した生活スタイルを拡大し、柳田の時代の異界の変化にも鈍感で、山・谷・川の異界のバランスの崩れが、自然災害を加速させ、現世の混乱を招いている。さらに、今日はデジタルサイバー空間が現世・異界の調和を崩そうとしている。『遠野物語』の示唆する自然と人間世界の共生の智慧を再考してみる必要がある。

一方、我々の1960～70年代の学生運動を思想的にリードした吉本隆明の『共同幻想論』では、遠野の物語を、判断力の低下によって目覚めていながら精神的に入眠直後に感じる

幻覚のような山人の物語であり、また村落共同体から見捨てられて、村落から離れたものは恐ろしい仕返しに合い、不幸になるという、欲望を貪る気持ちから離脱した山人の体験が生み出した物語であると酷評した。しかし、遠野の山人もまた、国家、村落、家族の枠組みの中で、現世と異界での日々の生活・衣食住との闘いがあった。

今、コロナ禍のなか、人混み合う都市近郊での自粛生活を如何に乗り越えるか、日常の過ごし方を模索している。海・山の自然、故郷、異郷、動植物は共に生きる力を与えてくれる。『遠野物語』をじっくりと読んでみるのも、野生と自然への回帰に後押ししてくれるかもしれない。